

2022 年度日本太陽エネルギー学会 研究発表会開催報告

太田 勇*

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症 (Covid-19) の影響に伴い、2 度に渡って Web 開催となっていた当学会の年次研究発表会を例年の地方都市開催とする決定をしたのは昨年 (2022 年) 1 月の理事会であった。新型コロナウイルス感染症が暫く落ち着いていた後の第 6 波の入り口にあった時期に開催された理事会では、リアル開催再開への期待とリスクに関する議論がなされ、感染症が拡大した場合には完全 Web 開催とする条件付きで承認された。

開催地となった福井市はケッペンの気候区分上は温暖湿潤気候に属するが、日本海側の内陸部に位置することから豪雪地帯に指定されており、「弁当忘れても傘忘れるな」と言われる地域である。常態化する感染症と向き合う一歩となる大会が、自然環境厳しい北陸において開催されることはただの偶然ではないだろう。

2. 研究発表会の概要

研究発表会は、2022 年 11 月 10 日～11 日の 2 日間、福井市にある福井県国際交流会館を会場に開催された。前日の 11 月 9 日にはプレイベントとして、一



図 開催地である福井市

表 発表分野と発表数

・気象/地球環境	12
・太陽熱利用	9
・太陽電池セル・モジュール	9
・太陽光発電システム	36
・風力/水力	1
・建築	17
・光化学/電気化学	1
・バイオマス/生物	4
・応用利用・エネルギー貯蔵	3
・理念/教育	1

乗谷朝倉氏遺跡散策と北陸電力富田発電所 (水力) の見学会を開催した。

今年度の合同研究発表会は 93 件の発表登録があり、その内訳は上表の通りである。

参加者数は、当日参加者を含め 143 名であった。濃厚接触に伴うもの等やむを得ない事情によるオンライン発表が 9 件あり、会場の対応には苦労があったが、滞りなく進行することが出来た。まさにコロ



図 研究発表会会場 (福井県国際交流会館)

* ミサワホーム総合研究所 取締役

ナ後の研究発表会の在り方を模索する大会となった。

研究発表運営委員会の委員は以下の通りである。
(順不同, 敬称略)

委員長	野村 裕宗	出光昭和シェル
副委員長	太田 勇	ミサワホーム総合研究所
	加藤 和彦	産業技術総合研究所
委員	石井 徹之	電力中央研究所
	伊藤 雅一	福井大学
	植田 謙	東京理科大学
	宇都宮 健志	日本気象協会
	高野 章弘	F-WAVE
	盧 炫佑	OM ソーラー
	益子 慶一郎	パナソニック

例年になく大会を無事終えることが出来たことに委員をはじめとする関係者のご支援とご協力に感謝の意を表します。

発表はそれぞれ持ち時間 14 分、質疑 5 分（交替

1 分）計 20 分で行われ、いずれの会場も Web 開催にはない一体感に溢れていた。

3. 特別講演

特別講演は、11 月 10 日、福井県国際交流会館大会議室で開催された。

初めに、日本太陽エネルギー学会・秋澤会長より、開催挨拶がなされた。

特別講演 I では、NPO 法人エコプランふくい吉川守秋氏より「福井県太陽光発電普及協議会の取組みについて」講演を頂いた。

続いて、特別講演 II として、福井県立大学恐竜学研究所 今井拓哉氏より「恐竜時代の福井：約 1 億 2000 万年前の福井の動物相と環境」と題した講演を頂いた。

吉川・今井両氏の講演はモニター越しの情報にはない“熱”があり、参加者にとって大変有意義な時間となった。



図 発表会の様子 (1)



図 コロナ禍の受付



図 発表会の様子 (2)



図 NPO 法人エコプランふくい 吉川氏による講演

4. 討議・懇親

Web開催となった昨年と一昨年の大会は梗概の投稿や発表こそ実現したものの、消化不良の感が否めなかった。発表時間後の何気ない立ち話や休憩時間のやり取りがないことがモヤモヤしたフラストレーションをもたらしていたのだと感じている。

例年の大会では学会主催の懇親会が企画され、会員相互の親睦も図っていたが、3年ぶりの開催となった今年度の大会では安全を最優先にした結果、公式の懇親会は見送りとなった。懇親会はただの飲み会ではない。学生や若手が各大学の先生方や業界の専門家と意見交換したり、各セッションで時間切れとなった議論を再開し、トコトン話し合うという場を設けられなかったことは大変残念なことであり、改めて感じることは、“当たり前”であったこ



図 福井県立大学恐竜学研究所 今井氏による講演

との尊さや価値である。

一方で、個別には非公式な懇親が図られたのも事実で、大会直前に漁が解禁となった越前ガニや福井名産の地酒を限られたメンバーで味わった大会参加者も多かったようである。来年こそは正式な懇親会を開催したいものである。

5. おわりに

手探りの中での開催となった大会は多くの課題を浮き彫りにしながらも、リアルで開催することの意義を再認識する場となった。出席頂いた会員の皆様、研究発表運営委員会の皆様、福井市の関係各位にはこの場を借りて改めてお礼申し上げます。

最新の情報を発信・収集する場としての研究発表会の在り方は時代と共に変えてゆく必要があると感じている。研究論文の発表時間、発表方法、セッションの区分等については検討の余地があるだろうし、特別講演のテーマについても過去の事例に捉われない案もあるように思われる。例年であれば企画していた企業展示やポスターセッションは見送りとなった。コロナ禍の開催ということもあり、発表数や現地参加者は例年には及ばなかったことも事実である。コロナ後を見据えた研究発表会の運営方法に知恵を絞りたいところである。広い意味で「太陽エネルギー」、「再生可能エネルギー」を自由に討議する場とするうえで望ましい環境がどのようなものであるか、考えたい。会員皆様からのご意見をお待ちしております。